

Hokkaido University Institute for the Advancement of Higher Education

ニュースレター



北海道大学 高等教育推進機構 Newsletter No. 113

新渡戸スクール (3ページ)

平成30年度全国大学教育センター等協議会参加報告
(15ページ)

全国国立大学生涯学習系センター研究協議会に出席
(17ページ)

「全学インターンシップ成果発表共有会」開催
(20ページ)

(詳しい目次は裏表紙にあります)

巻頭言 FOREWORD

入試改革に関する最近の動向

アドミッションセンター 副センター長・教育改革室 総長補佐 藤田 修

2017年4月よりアドミッションセンター副センター長および入試制度検討WGの座長として入試に関する業務に携わっています。この業務に関わるまでは入試関係は全くの素人と言ってもよく、この役割を担ってから担当事務の職員の方々および関連の先生方に教を請いながら日々役割を果たしているというのが実情です。

さて、大学の入試改革に関して最近の最大の話題は高大接続改革とそれを受けた多面的評価に基づく入学者選抜改革への動きです¹⁾²⁾。これは、明治以来先進諸国に追随するうえで知識・技能が重視されていた時代から、将来どのような職業が存在してい

るかも見通せない時代への遷移を背景として、この時代を生き抜いて行くために必要な本当の学力を持つ若者を初等・中等・高等教育が連動して育成していこうという考え方によるものです。ここで本当の学力とは、いわゆる学力の3要素と呼ばれるもので、「基礎的な知識及び技能」「これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の能力」「主体的に学習に取り組む態

度]とされています。一方で現在の大学入試は知識・技能に偏重しているという一般的認識があり、大学入試において「思考力・判断力・表現力」や「主体性」を積極的に評価するような多面的評価による入試への期待は大きいものがあります。またその一方で、従来のAO入試（平成33年度入試以降は総合型選抜と呼ばれる）には“学力試験を課さない入試”という認識があり、学力が十分に担保されない場合には入学後に学生が教育を受けるうえで支障が生じる懸念もあることから、中教審答申¹⁾のなかでは高等学校での学習成果を確実に把握する必要性を指摘しています。この点についてはAO入試でも大学入学共通テスト（大学入学センター試験の後継試験）の受験を推奨するなどの提言も同時になされています²⁾³⁾。したがって、従来の一般入試には多面的評価を取り入れていくこと、一方で従来のAO入試には学力の確認を確実にやっていくことが大きな流れになっています。

このようななか、従来の大学入学センター試験は大学入学共通テストと名称を変え、従来以上に思考力・判断力を問う問題へと変わるといわれており、記述式問題の新たな導入や英語についてはWritingとSpeakingを含む外部試験の導入なども進められています。また、北海道大学においても多面的評価に基づく入試の導入について種々の検討が行われています。紙面の都合で個々の検討事項についてここでは記載することができませんが、従来のAO入試や面接試験を導入している入試区分では従来以上に「主体性」や「思考力・判断力」といった知識・技能以外の評価を取り入れる方策や、一方で総合型選抜では受験生の多様な資質と高校での学習成果を把握できるような形態について検討を行っています。本入試改革に関しては本学の各学部あるいは各入試単位へたびたびのアンケート等でお手を煩わせており、この場を借りて改めて御礼を申し上げます。

また、上述の動向と連動して入試の多様化・国際化の動きも進んでいます。例えば、2017年度から国際バカロレア取得者（あるいは見込）または米国のSAT・ACTで所定のスコアを提出できる方を対象として文系5名、理系10名の定員で国際総合入試を開始しています。2017年度は15名の定員に対し12名の志願者でしたが、本年度は17名に増加しており今後

知名度の向上とともに志願者の増加が期待されます。国際バカロレアは国際的にも評価の高い教育プログラムで一般入試とは異なる背景を持った学生の入学が期待されます。このほかにも、現代日本学プログラム課程やISPプログラムなど海外からの受験生を想定した入試制度など多様な学生の受け入れに向けて制度を充実させています。現時点でこれらの入学定員は限定的ですが、これから国内の少子化が進む一方海外等からの受験生が増加する傾向が続く場合には、これらの多様な入試制度の枠が相対的に大きくなっていく可能性もあります。

このような多様な入試が拡大していくと、高校での教育の背景が異なる学生が多数入学することになります。今後はこのような多様な学生個々の能力を最大限引き出していくための教育システムなど、入試単独の問題としてではなく大学全体の教育改革との有機的な連動が不可欠と思います。また、上記の多様な入試や前述の学力の3要素を多面的に評価する入試などを通して入学してきた学生について、入学後やさらに大学を卒業した後の社会での活躍などの追跡調査を行い、これを常々現時点での入試改革へ反映させていくことも欠かせない部分と考えています。入試はこのようなフィードバックを受けながら少しずつ変わっていくという性質のもので、短期的には変化が小さくとも10年経過したところで振り返ると意外と大きく変わったことに気づくようなものではないかと思っております。いずれにしても北海道大学に少しでも良い学生が入学し、さらにその学生たちが将来多様な分野で活躍していただけるよう、引き続き入試制度について議論を深めてゆきたいと考えております。

参考資料

1. 中央教育審議会答申「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」、平成26年12月22日
2. 高大接続システム改革会議「最終報告」、平成28年3月31日
3. 文部科学省「平成33年度大学入学者選抜実施要項の見直しに係る予告の改正について」、平成30年10月22日

新渡戸スクール

はじめに

大学院特別教育プログラム「新渡戸スクール」は、グローバル社会の課題解決に資する人材の育成を教育目標に掲げ、平成27年度に創設されました。本スクールは、修士課程の学生を主な対象とする**基礎プログラム (Basic Program)** (定員は創設当初60名、平成29年度以降120名) と博士課程の学生を対象とする**上級プログラム (Advanced Program)** (平成29年度に開始、定員25名) とで構成されます。総合大学である本学の全ての教育部局にまたがる分野横断型の人材育成プログラムで、多様な専門性や様々な文化的背景・価値観を持った学生が参加できる教育の場として「国際社会の縮図」を構築し、英語によるチーム学修 (Team-based Learning, TBL) やプロジェクト型学修 (Project-based Learning, PBL) を通して、**「専門性をグローバル社会の課題解決に活かすために必要な力」**を養成しています。基礎と上級で身に付ける能力の種類やレベルは異なりますが、それぞれに適した特徴ある教育課程の実現に向けて取り組んでまいりました。

また同時に、教育支援制度の充実にも取り組んでいます。その中には、NITOBEPポートフォリオ (NITOBEP Portfolio) システムを利用した修学過程の可視化と修学支援、プレイスメントテスト (英語能力試験および行動特性検査) による能力・適性診断、学生の所属部局の教務専門委員会教員が担うアドバイザーによる修学支援、スクールのメンターによるキャリア・人脈形成支援を目的としたメンターフォーラム (Mentor Forum) の開催などがあります。昨年度には、スクール在学学生・修了生・メンター・教員の相互交流の場として、同窓会も発足させました。

以下では、これらの新渡戸スクールの取り組みについて紹介いたします。

(スクール教頭・小田 研)

基礎プログラム

「なにを」—教育理念・教育目標

「専門性をグローバル社会の課題解決に活かすために必要な力」とは具体的に何か。新渡戸スクールでは、これを以下のように「3 + 1の力 (3 + 1 Competencies)」と定義して、その養成に向けたカリキュラムの開発と実践に取り組んできました。新渡戸スクールの教育目標は「3 + 1の力」を涵養することです。

1. 能力更新力

自分自身の将来像や向かうべき目標、求められる知識やスキル、そして、それらを身につけるための手段や方法をしっかりと把握し、自分自身を成長させ続ける力。

2. 組織形成力

専門家として自立しながら、異なる専門性や価値観を持った人とチームを組み、共有する目的や目標に向かって、互いの専門性を理解、尊重し、起こり得る対立を調整し、資源を有効活用して、成果を最大にするよう協働する力。

3. 社会還元力

社会の利益や幸福を最大化するため、社会的なニーズに基づいた提案・実行を担う役割を果たすことで、専門家として社会に能力を還元する力。社会における役割を認識する力、新しいアイデアを提案する力。

+ 1. 専門職倫理

高度な教育を受けた専門家として、自己の利益のみにこだわらず、広く社会全体の利益や影響も考え、公正・公平な判断を下し、その決断に責任を持つこと。他者への配慮、倫理問題への敏感さと適切な対応力。

新渡戸スクールでは、これら「3 + 1の力」を身につけ、応用するために必要となる基礎的な知識やスキルの修得や強化を同時に行っています。これには、(1)独創的なアイデアを創出するための創造的思考法 (Creative Thinking skill) と、創出されたアイデアをデータに照らして批判的に分析し、実現可能な概念やプロジェクトへと昇華させる批判的思考法 (Critical Thinking skill) を不可分な相補的關係の中で理解し、応用する能力、(2)異なる背景、価値観、専門性を持った仲間との協働を実現するために必要不可欠となるコミュニケーション能力、その中で発揮される実践的な英語力、(3)ファシリテーション、時間管理 (Time Management) など、リーダーシップ、つまり「協働が意義ある成果を上げるために必要となる関係性」の構築と維持に貢献する能力。(4)ディスカッションをはじめ協働からの結果を聞き手、コンテキストに合わせて効果的、説得的に発表するプレゼンテーション能力、が含まれます (図1)。

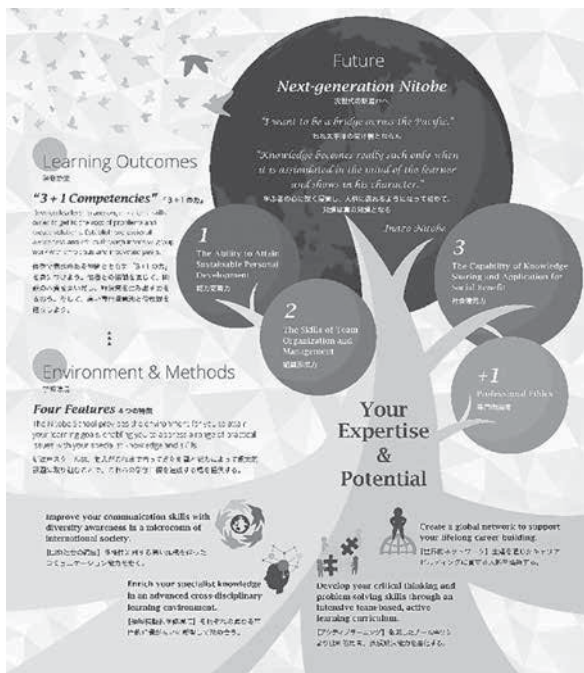


図1 「3 + 1の力」と学修環境

くどのように「学修環境・教授法

では、これらの力をどうやって修得するのか。新渡戸スクールは、専門分野を問わず、北海道大学の全ての大学院生が共に学修するフォーラムとしての機能を果たしています。ここでの多様性とは、知的関心や専門分野だけではなく、国籍、人種、エスニ

シティ、ジェンダー、セクシュアリティ、年齢など、あらゆる属性、そこから生じる価値観と規範に基づく多文化状況を意味し、それを「国際社会の縮図」と表現しているわけです。ですから、これは単に留学生を積極的に受け入れることだけではなく、周りにある相違性を理解し、互いに尊重すること意味します。そういった多文化状況下において、英語を「共通語」として、チームでプロジェクトに取り組むことを中心とするカリキュラムに沿って授業を行っています。

新渡戸スクールは、1年間のプログラムで、各8週間の4ターム (春・夏・秋・冬) のクォーター制を導入しており、1年で4つの科目を提供しています。これらの科目は、各々異なる目的 (Goal) をもっており、履修する学生は、それに合った異なる課題に取り組みますが、上述した理念と目標 (Objective) は共有されており、学習の成果が積み上がるよう、相互に関連性と連続性をもって実施されています。以下、各科目について、2017年度の授業内容で例示しながら、要点に絞って説明します (図2)。

Spring	Summer	Fall	Winter
Basics of Team-based Learning チーム学習の基礎 Students develop critical thinking skills and acquire knowledge and techniques essential for team-based learning. チーム学習に必要となる基礎的思考力と技術を習得します。	Practice of Team-based Learning チーム学習の実践 Students reinforce their team-based learning abilities through intensive case-study discussions and practice exercises. 集中学習的アプローチを通じて、実践的課題に対するチーム学習の能力と実践力を強化します。	Problem Solving 課題解決 Students practice their critical thinking and apply their acquired knowledge and skills to address scientific and socio-cultural issues. 習得した知識と技術を駆使して、実践的課題に対する多岐多様なチームで挑戦します。	Problem Finding 問題発見 Students participate in collaborative research projects and they learn about the entire process of ideating and solving problems, which begins with defining the problem and ends with analyzing its causes based on the data set has been collected by the students themselves. この新渡戸スクールで学修することを念頭に、自ら発見したテーマを軸に、調査・研究、解決の過程、発表の準備までのプロセスにチームで取り組めます。

図2 ターム制度と授業骨子

チーム学習の基礎 Basics of Team-based Learning (春ターム)

新渡戸スクールでの学修に参加し、目標となる「3 + 1の力」の重要性を理解するとともに、その修得に必要なさまざまな力を、チームでの課題に取り組むことを通じて身につけます。

● 創造的思考と批判的思考の相補

学生は、大学院における調査・研究を通して、批判的思考の重要性について学び、必要となる知識と技法を身につけます。しかし、独創的、革新的な研究を実施するためには、立案・計画の段階だけではなく、調査・研究の過程を通じて、批判的思考と創造的思考を循環的に駆使することが必要です。スクールでは、軽視されがちな創造的思考の重要性に

学生の注意を向け、批判的思考と相補的に駆使できる能力の涵養を目指した課題に取り組んでいます(図3)。

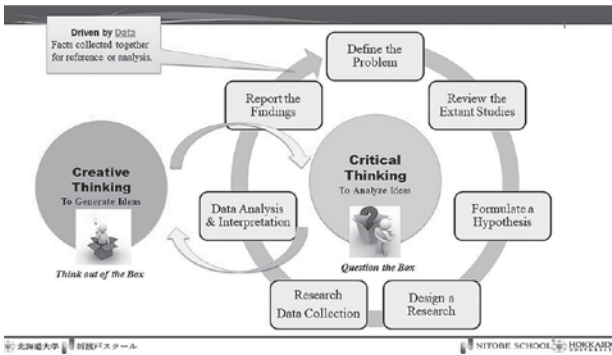


図3 創造的思考と批判的思考の相関

● <関係としての>リーダーシップ

新渡戸スクールでは、リーダーシップをリーダーの資質を含むより大きな概念、リーダーを中心とした関係性として捉えて、教育を行っています。つまり、リーダーになることは、リーダーシップに貢献する絶対要件ではなく、リーダーでなくともリーダーシップには貢献しなくてはなりません。この理解の上で、リーダーシップにどのような貢献ができるか、そのために何が必要かを実際のプロジェクトを通して考えています(図4)。

図4 関係としてのリーダーシップ

● 学際的テーマへの取り組み

新渡戸スクールでの課題設定で重視されるのは、学際性です。例を挙げると、創造的思考と批判的思考の相補的な関係性を学んだあと、その知識に実効性と応用力を持たせるために、2017年度は、“Technology toward Gender Equality”という課題に取り組みました。「テクノロジー」という語は、現在では非常に矮小化された定義が定着し、われわれ

の思考もその定義に縛られていますが、もともとこの語は、さまざまな有形、無形の「手段 (art)」を意味していました。そこで、学生に時代によって、また専門分野によって異なる定義をいくつか例として示して、自らが依拠するテクノロジーの定義をまず創造し、それに基づいて、ジェンダーに基づく不平等を是正するテクノロジーにはどのようなものがあるか、チームで議論しました(図5)。

図5 学際的テーマへの取り組み例 (Technology toward Gender Equality)

● 専門職倫理

新渡戸スクールでは、①学生が自らの研究分野を超えて、知識と関心の多様性を尊重することが専門家としての第一歩であり、違いの相乗から生まれる

共通の倫理的問題について議論する、②本スクールが全学プログラムであることを念頭に、北大教員・研究者の経験と知識を活用し、自らの研究内容と研究者としての倫理についてお話しいただくことで、

スクールが「FD拠点」としての役割を果たし、北大全体に貢献する機会を作ることを目的として、本タームに専門職倫理に関する授業を一般公開で行っています。2017年度は、北海道大学の教員2名、学外講師1名がそれぞれの専門分野に根ざして、専門家としての倫理観と当事者意識、社会還元についてテーマを提供し、学生は非常に活発な意見交換を行いました(図6)(写真1)。

NITOBE SCHOOL
HOKKAIDO UNIVERSITY

Spring Term 2017
Basics of Team-based Learning for 7th Week
Professional Ethics

The 7th-week class (June 12-16) addresses "Professional Ethics" with reference to concrete case studies. The schedule and instruction are as follows:

Schedule

Date	Title/Topic/Language	Lecturers	Assignment
Monday, June 12	War and Ethics: Research, Development, and Dual-use (in English)	Prof. Shunzo Majima (Ehime University)	E-learning
Tuesday, June 13			
Thursday, June 15	人体実験と倫理: アイス研究における科学的探究と遺骨賠償問題 Ethics in Human Subject Research: Scientific Quest and Reparation in Aizu Studies (日本語 /in Japanese)	Prof. Hiroaki Oda (Hokkaido University)	Reading Assignment (Newspaper article)
Friday, June 16	Ethical Dilemmas on Environment and Medical Technology (in English)	Prof. Ken Saito (Niigata School)	E-learning

Instructions

- During this week, you are allowed to participate in any class(es), according to the relevance to your research interests and agenda -- regardless of the day of the week you usually attend. In the case that you want to be present at a class on a date other than a date of your usual participation, you must notify it to instructors personally, or by emailing at ns_spring_term@ml.hokudai.ac.jp, during the week **by Friday, June 9 (3:00 pm)**.
- You are required to complete a homework assignment that is essential for your understanding of the lecture and engagement in group/class discussion. As indicated above, there will be different assignments for different dates/lectures. **You should carefully get and follow further in-class guidance regarding the assignment.**

図6 専門職倫理(2017年度実施概要)

チーム学習の実践(夏ターム)

本科目において、学生は、春タームに体得した基礎的な知識やスキルを、実践を通じて定着させながら、チームで効果的・効率的に協働するために必要となるプロジェクトマネジメントの基礎を学び、「3+1の力」のさらなる向上を目指しています。また、8週目の最終授業として「メンターフォーラム」が開催され、社会でプロジェクトを実行する経験やグローバルに活躍する経験をメンターから講演いただき、将来のキャリア形成に役立つネットワーキングに取り組みました。

● プロジェクトマネジメント

春タームでは、創造的思考・批判的思考・リーダーシップや専門職倫理といった、チームで協働するための個々の能力を重点的に扱ってきました。夏タームでは、これらの能力を前提として、学生たちはチームでプロジェクトを効果的・効率的に遂行するためのプロジェクトマネジメント(PM)の基礎を学びます。これは、プログラムの後半、秋・冬タームでさらにプロジェクト形式での学修に取り組むために必要となるからです。また、新渡戸スクールでの学修だけではなく、それぞれの大学院で行っている研究も「プロジェクト」であり、それをどのように計画し、遂行するかを経験しておくことは、非常に重要なことです。

● 課題プロジェクト

前年の2016年度は、課題プロジェクトとして、仮想的な街の地図を与え、たうえで「災害に強い街づくり」をテーマと設定しました。2017年度は、さらにリアリティを以て課題に取り組むために、2050年に向けた北大のキャンパスマスタープラン作成を行いました(図7)。

写真1 専門職倫理(授業風景)

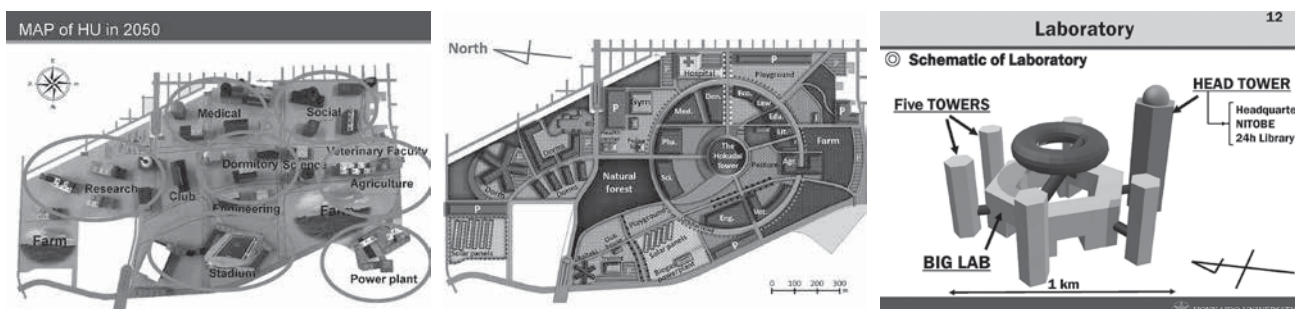


図7 2017年度夏ターム・プロジェクト成果例(Hokkaido University Master Plan 2050)

課題解決 (秋ターム)

この科目において、学生はあらかじめ課題設定されたテーマに対して、チームでの協働を通じて解決策の提案を試みます。2017年度は、共通テーマを「難民・移民」としました。2016年の国連難民高等弁務官事務所の推計によると、全世界で6千5百万人以上の人々が国を追われており、グローバルな問題としてますます重大な課題になってきています。新渡戸スクールでは、「難民・移民」の問題をあくまで学際的、領域横断的な問題として捉え、学生たちは、それぞれの専門分野に根差して、どのような貢献ができるか、そして、それをチームとして行う場合、どのような相乗効果が生まれるか、について考えました (図8) (写真2)。

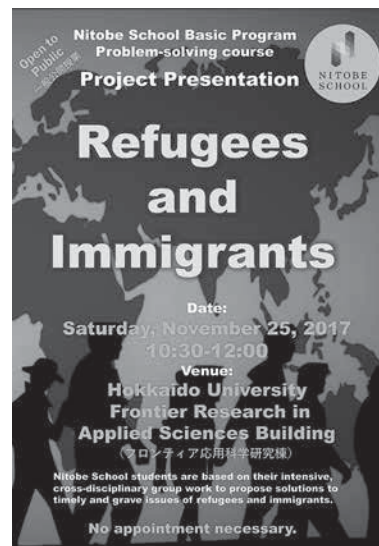


図8 2017年度秋ターム・プロジェクト成果発表 (広報ポスター)

写真2 2017年度秋ターム・授業風景

写真3 2017年度秋ターム・外部講師による講演(金井昭雄・富士メガネ会長)

写真4 2017年度秋ターム・外部講師による講演 (Assi Alghazali氏)

● 特別外部講師

2017年度は、この共通テーマに関連した外部講師を多くお招きし、彼らとのディスカッションを通じて、学生は自らの専門性を活かしてどのような貢献ができるかについて考えました。外部講師には、30年以上にわたって、難民への視力支援事業を行い、「2006年ナンセン難民賞」を受賞した富士メガネ・金井昭雄会長 (写真3)、内戦の続くシリアから日

本に移住し、現在札幌在住のシリア人Assi Alghazali氏 (写真4)、中東をはじめとする紛争地域で長らくフォトジャーナリストとして活躍してきた田邑恵子氏、青年海外協力隊員としてシリアの難民キャンプで支援活動をしてきた鈴木雄太氏など、現場をよく知る講師から生の情報を得ただけでなく、内戦の続くウクライナの国内避難民の状況について研究者の藤森信吉氏から学術的な情報もいただきました。

課題発見 (冬ターム)

本科目では、学生がチームを組み、テーマの選定、既存のデータ・情報の整理と評価、フィールド調査による一次データの収集、収集したデータの批判的分析を一貫して行うことで、問題を発見することの重要性と困難さ学びます。加えて、調査結果を的確にまとめて発表し、プロジェクトへの協力者、調査対象者に伝えることで、社会還元や専門職倫理への意識をさらに高めています。8週間という限られた時間でフィールド調査を実施し、データ分析と英語での成果発表を行わなければならないため学生にとっては、他のターム科目よりも参加と貢献が求められますが、しっかりとやり終えた学生からは実りのある体験であったという意見が多く寄せられています (写真5)。

写真5 2017年度冬ターム・「課題発見」のためのフィールドワーク

● プロジェクト・プロポーザル作成の徹底

学生は、調査方法などを念入りに検討したプロポーザル作成に時間を費やすことで、大学院での研究を含め、あらゆるプロジェクトで最も重要なのはプロポーザルであることを改めて理解します。また、プロポーザルフォームに加えて、スクールでは、Fieldwork Log Sheetを準備し、フィールド調査を実施した場合、学生がその内容と成果について詳細に記録するという習慣を身につけています。

● 一般公開によるプレゼンテーション

新渡戸スクールは、本学のすべての大学院生を対象にした教育プログラムであり、社会貢献や専門職倫理を目指す学修成果の柱としています。本ターム

は、1年間のプログラムの締めくくりにあたり、スクールでの成果を広く大学内外に還元して、しっかりと批判を受けることを目的として、教室を飛び出し、本学付属図書館本館や博物館セミナールームなどで最終プレゼンテーションを行います。プレゼンテーションの一般公開を念頭に、2017年度は、The Future of Sapporoを共通の大枠テーマとして、3クラスがそれぞれ「農業」「食」「グローバル化」というサブテーマの下にプロジェクトを実施しました (図9)。

(スクール特任准教授・辻 輝之)



図9 2017年度冬ターム・プロジェクト成果発表 (広報ポスター)

上級プログラム

上級プログラムの概要

上級プログラムでは、学生自らの専門的知識を活かし、新渡戸スクール基礎プログラムで学んだ「3 + 1の力」を用いて、自らがリーダーとなり学内外の専門家からなるチームを形成し、自らが考えたプロジェクトを実行します (写真6)。

学生は、上級プログラムで一年間学修した経験を通して、リーダーとしてプロジェクトを推進するための基礎的な“能力”を向上させるとともに、国際社会で活躍する開拓者 (先見性を持ち、新たな領域を切り開く草分け的なリーダー)に求められる“行

動力”及び“自信”を身につけます。

写真6 2017年上級プログラム参加学生(15学科, 博士課程)。
日本人学生: 10名, 留学生: 15名 (12カ国)。

授業の進め方

プログラムでは、2科目の主要科目で構成されています。ガイダンス、講義、発表会、開拓者ワークショップ(年5回)以外は、各自でプロジェクト計画書を作成し、プロジェクトを実行していきます。

プロジェクト実行科目Ⅰ(春, 夏ターム)

本科目では、各専攻で学んでいる専門性を基軸にし、自らがリーダーとして、国内外の専門家を集めチームを構築するプロジェクトを提案・企画します。自らのプロジェクトを明確化し、人に伝える力をつけるために、「Grant & Research Proposal Writing」を徹底的に訓練します。学生は、プロジェクト計画書の書き方の講義を受講後、実際に自らの計画書を作成し発表を行います。計画書は、指導教員を含む自らのチームメンバーだけでなく、新渡戸スクール担当教員、上級プログラムを受講する他の学生のチェックを受けることで、自らのプロジェクトの企画を飛躍的にブラッシュアップし考えを明確化することを目指します。さらに、英語でのプレゼンテーションに関する技法を学ぶとともに、他の学生の前で計画を発表することで、伝える能力を向上させるための訓練を行います。

プロジェクト実行科目Ⅱ(秋, 冬ターム)

本科目では、「実行科目Ⅰ」において企画したプロジェクトを実行します。各自でプロジェクトを実行するだけでなく、進捗状況に関する報告会を行うことで、上級プログラム参加学生同士で問題点等を共有し、お互いの力を向上させます。

開拓者ワークショップ(通年)

「開拓者ワークショップ」では、学生がチームを

作り(各回5名)、企画、運営を行います。単に与えられた機会において受け身で話を聞くというのではなく、自らが率先して企画、運営することで、積極的に行動する力やマネジメントする力を身につけます。講演者との交流を通して、経験を学び、国際社会において開拓者となり、プロジェクトを進めていくために必要なことを学びます。

実施状況

実行科目Ⅰ： 学生は、新渡戸スクール担当教員によるプロジェクト計画書の書き方の講義を受講後、実際に自らの計画書を日本語または英語で作成しました。指導教員、自らのチームメンバーや新渡戸スクールの教員のチェックを受けることに加え、学生同時のペアレビューを行い、少なくとも3度の書き直しをおこなったことで、考えを明確化することができました。他の学生のプロポーザルを査読することを通して批判的視点を身につけ、自らの研究に反映させることができたという学生からの意見がありました。

実行科目Ⅱ： 実行科目Ⅰにおいて企画したプロジェクト各自で実行するだけでなく、中間報告会、最終報告会を行い、上級プログラム参加学生同士でプロジェクトの実行方法、問題点等を共有しました(写真7)。異なる分野の学生、指導教員、新渡戸スクール担当教員の前で発表することで、プレゼンテーションにおいて重要になる聞き手のことを意識して発表できるようになったこと、新渡戸のプログラムでは、単に博士の学生が集まり講義を聞くのではなく、学生のそれぞれの専門内容を聞くことができたことがとても参考になったこと、文系、理系、分野が異なるが、共通の実行(実験)方法、問題点があることがわかり有意義であったなどの意見が学生からありました。

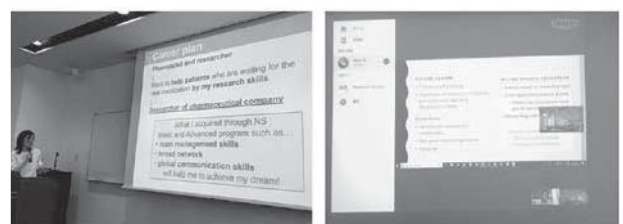


写真7 学生プロジェクト最終発表の様子。ギリシャに留学、ザンビアにフィールドワークに行っている学生たちはネットを繋ぎ発表。

開拓者ワークショップ： 基礎プログラムで学んだプロジェクトマネジメントの知識を活かし、企画、運営し、学内外から講演を招待しました（図10、写真8）。講演者から経験を学び、国際社会において、草分け的なリーダーとしてプロジェクトを進めていくために必要なことを学びました。

異なる出身国、分野の学生とチームを組み短期間でプロジェクトを進めることが困難であったが、単に与えられた機会において受け身で話を聞くというのではなく、自らが率先して企画、運営することで、積極的に行動する力やマネジメントする力を身につけることができましたという意見がありました。

トップにつなげ成果を出している学生が既にいることは上級プログラムの大きな成果です。

分野横断の本プログラムに参加することによって、学生は異なる専門分野の特徴と重要性を体得し、互いを高め合うことができ、プログラム開始時と比べ、修了時には学生は大きく成長し、国際社会の中で、開拓者として活躍していきたいという自信をつけていました。本プログラムは、他に類がなく、国内外の社会が必要とする人材を育成するための領域横断プロジェクトの実施のさきがけであり、北海道大学の教育プログラムとして重要であると確信しています。

(スクール特任准教授・繁富(栗林)香織)

写真8 開拓者ワークショップの様子。講演者：(右) 北海道大学 遺伝子病制御研究所 藤田恭之先生、(左) JICA 箱山富美子先生。



図10 開拓者ワークショップ（学生作成ポスター例）。

新渡戸スクール上級プログラム 総括

平成28年度の上級プログラムの試行での経験、反省点を踏まえ、平成29年度は、新渡戸スクール担当教員と学生の指導教員とより緊密に連携し、プログラムを遂行することができました。その結果、履修者25名（平成29年度）全員がプログラムを修了することができました。現在は、24名の学生は現在プログラムの進行中です。大学、研究所での正規ポジションを獲得した学生や学振、民間の研究費を獲得した学生など、上級プログラムで得た経験を次のス

学修支援

NITOBE Portfolioシステム

教育分野におけるポートフォリオの一般的な定義として「ポートフォリオとは、自身の学習、スキル、業績を実証するためのあらゆる成果を、ある目的のもと、組織化/構造化しまとめた収集物である」が定着しています (M. Jones et al. *Developing Your Portfolio: Enhancing Your Learning and Showing Your Stuff*. Routledge, 2006; 森本康彦他編『教育分野におけるeポートフォリオ』ミネルヴァ書房, 2017年)。新渡戸スクールでは、(1)学修履歴の可視化、(2)自己評価作成、(3)学修成果や過程の他者との共有、を目的としてポートフォリオの導入をしています。生命科学院で導入していたポートフォリオをベースに(1)大学院教育に適用可能である、(2)日英バイリンガルで提供できる、ことを満たすポートフォリオとして独自に開発を進めています。NITOBE Portfolio (NPF) は大きくわけて「授業支援」、「研究日誌」、「自己評価」の3つの機能を提供しています。

「授業支援」はELMSとの重複も多いですが、北大以外から進学してきた学生でもすぐに使えること、新渡戸スクールに関係するデータはNPFで一括管理できることはメリットとして挙げることができます。独自の重要な機能としては、授業毎に学生から評価とフィードバックコメントを得る機能が挙げられます。個別に自由記述コメントを残せるので、授業に対する質問や不満を打ち明けてもらうことができます。これらのリアルタイムフィードバックにより逐次授業改善できます。また2017年度からは教

員から返信できるようになり、授業では取り上げきれない個別の質問に答えるなど柔軟な対応ができるようになっています（図11）。



図11 フィードバックコメントとその返信の例

2015年度には出欠管理機能を実装しました。学会等により欠席する場合、学生は事前に欠席理由を投稿しておくことができます。2017年度にはグループワークを支援できる機能を実装しました。メンバー同士のチャット機能や参考資料、議事録などのファイルを共有できる機能を備えています。教員は全てのグループワークページを閲覧でき、適宜アドバイスしています。図12にグループワークチャットの様子を例示します。

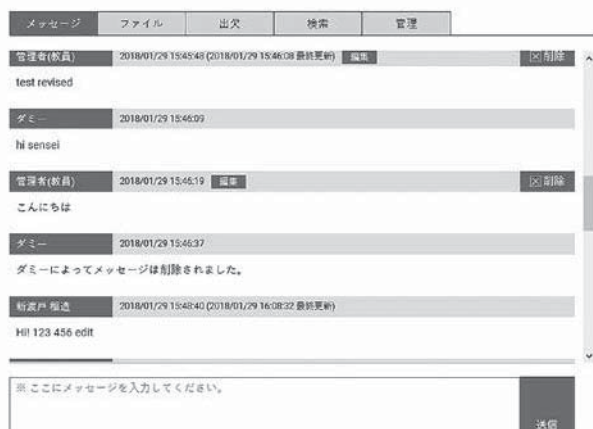


図12 グループチャットページの例

「研究日誌」は大学院生向けポートフォリオとして最も重要な機能です。学生は自分の研究に関することを日記のように記録でき、そのうち必要なものを指導教員とシェアできます。研究指導支援システムとして、また自身の過去を振り返ることで成長を実感し、新しい目標を設定するといった用途が期待されます。主な記録内容は『活動内容』、5段階評価による『評価項目』、自由記述の『自己評価に対するコメント』となります（図13）。『活動内容』は

学生の研究活動を記録するために便利なテンプレートを提供しています。『評価項目』では、ルーチンワークとなるような項目をあらかじめ設定しておき、その達成度を数値評価できます。この記録は1週間、1ヶ月、3ヶ月、半年、1年といったスパンで後から振り返ることができ、自分の行動評価のバロメータになります。『自己評価に対するコメント』は日記として活用できます。このコメントはアドバイザー担当教員へ公開して共有するか、非公開にするか選択できます。



図13 研究日誌の入力状況サンプル

「自己評価」は「3 + 1の力」と「専門力」を評価項目とする五角形のグラフで、通称ペンタグラムと呼ばれています。「3 + 1の力」は能力ごとに6-8の要素に分解されており、学生はチーム毎に各要素を5段階で評価し、該当チームの学びを振り返ります。この評価が加算され、ペンタグラムに表示されます。専門力は研究日誌をつけていくことで加算されます。評価を繰り返すごとにグラフが成長し、自分の成長を可視化しています（図14）。「3 + 1の力」は独自定義であり、その成長はどのように評価されるのかという問題はスクール開始時からの課題として議論が重ねられています。現在は学生の自己評価をそのまま数値化し、加算によって増えていく単純な方法を採用していますが、今後分析が進むにつれて仕様を更新する予定です。

NPFはこれまでスクールで行なっているカリキュラムをサポートする機能を充実させてきました。現在は全学展開を見据えた汎用的な機能を実装

する段階へと入ってきています。新渡戸スクールで開発したポートフォリオを順次各部局へ導入することが北大の第3期中目標として挙げられています。来年度は学部生向けプログラムの新渡戸カレッジに導入します。各部局への展開としては、部局の特別プログラムや専攻へ試験的に導入する形で徐々に広がっています。

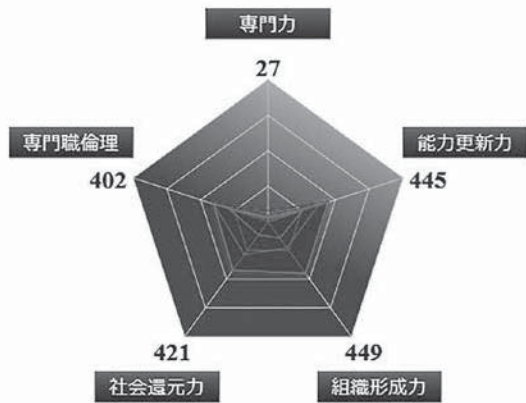


図14 ペンタグラム

NPFは毎年改善が加えられており、今後は「研究日誌」とスマホからのアクセスに重点が置かれた開発が予定されています。日常的に記録をつけてもらうために、携帯端末からアクセスしやすくします。次期ELMSの更新時にはELMSへ組込むことでさらにアクセスを容易にできるよう検討されています。「研究日誌」は自身の記録をダウンロードして業績一覧を作成する、就職活動等の自己アピールのエビデンスとして使えるようにします。また、研究日誌の最大のメリットである指導教官との情報共有を改善します。試験導入していただく研究室やプログラムと協力し、現場で使える機能を強化します。講義に捉われない日々の学修活動を一括で記録し、成長を促進するシステムに向けて開発と普及が続けられています。

Student EQ—学生の行動特性調査

新渡戸スクールの教育目標である「3+1の力」の学修程度をどのように評価するのか。NPFで学生の自己評価によるデータを蓄積する一方で、客観的で社会で広く使われている指標を他に置くことでその評価方法を確立しようという試みがなされました。そこで、大学生協が提供しているStudent EQ

(SEQ)を導入しました。SEQはEmotional Intelligence理論(P. Salovey et al. 1990. “Emotional intelligence.” *Imagination, Cognition, and Personality*, 185)に基づき、大学生向けに行動特性を評価するテストであり、大学生協が開発・提供しています(大学生協学生EQセンター <http://seq.univcoop.or.jp>)。

新渡戸スクール生としての在籍期間中に定期的受診し、各自の行動特性を知ることができます。2015年度、2016年度は基礎プログラム修了要件として修士の学位が必要であったため、多くの学生は2年間新渡戸スクール生として在籍し、入校時、年度末と修了直前(卒業時)の計3回受診する機会がありました。2017年度からは1年間で修了できるようになったことから、入校時と年度末の2回の受診機会が提供されています。また、上級プログラムの学生にも受診を推奨しています。SEQは日本語ではweb受診が提供されています。一方、英語は紙ベースのマークシートテストが提供されており、テスト日を設定して受診してもらっています。

テスト受診後、EQプロファイラーの資格を持つ生協職員によるSEQ説明会を開催しています。また、2016年度からは、EQプロファイラーとの1対1の面談「対面フィードバック」が希望学生に提供されており、個別にSEQのスコアを見ながら自身の強みや弱みを客観的に振り返り、さらに成長するためのアドバイスを受けることができ、学生から高い評価を受けています。

新渡戸スクール生全体のSEQスコアの変化はEQプロファイラーによってまとめられ、スクールへフィードバックされています。このデータに基づいてカリキュラムを見直し、より良い講義を提供する仕組みの実装を試みています。

(スクール特任助教・今井 匠太郎)

メンターフォーラム

新渡戸スクールでは毎年、本学の卒業生・修了生を中心に、社会の多様な分野で活躍する30~40代の方々にメンターに就任していただいています。メンターは、研究者、会社員、起業家、行政職員、政治家など、さまざまなプロフェッショナルからなり、彼らの多くは、海外で研究したり勤務したりした経験をもち、英語が堪能です。メンター制度は、新渡戸スクール生のキャリア意識を醸成し、社会的視野

を広げ、人的ネットワークを形成するために支援することを主な目的としています。

毎年開催されるメンターフォーラムは、学生がメンターから直接そうした支援を得ることのできる貴重な場となっていて、スクール生が大学院修了後のキャリアを念頭に、身近なロールモデルであるメンターとの交流を通じて、自身のキャリアパスをより具体的に考え、理解を深める絶好の機会となっています。

2018年8月4日に開催された今年度第1回目のメンターフォーラムを例にとります。夏タームにプロジェクトマネジメントの授業を基礎プログラム生が受講したことを受けて、第1部として“Why Planning Matters, What Global Leader Means”というテーマでメンター講演会を行いました。Ooi-kock Teh博士(北大)、山本浩一博士(山口大)、萩野泉博士(電通)、佐伯百合子氏(資生堂)、Eric Ofosu-Twum博士(日立)、藤井幸大氏(サンマルコ食品)、という多彩な背景をもつ6名のメンターが自身のキャリアを学生に紹介して、研究や仕事においてどうチームを率い、マネジメントしてきたか、経験に裏打ちされたアドバイスを学生に伝えました(写真9)。

写真9 講演会で自身の経験を語るメンター

ちなみに12月1日開催の第2回目メンターフォーラムでは“Embrace Your Expertise, Transcend Its Limits”をテーマに、自身の専門を持ちながらも異

なる世界で活躍してきた、萩野博士、Abhijeet Ravankar博士(北見工大)、中原拓博士(JT)、Rafal Rzepka博士(北大)、和田義明氏(衆議院議員)の5名のメンター、および特別ゲストとして越直美大津市長にお越しいただき、自らの専門を社会にどう活かし、どのように専門の垣根を越えて第一線の業績をあげてきたか、お話しいただきました。

スクール生は、多様な分野でグローバルに活躍しているこうしたプロフェッショナルたちからの熱いメッセージに毎回、大いに刺激を受けています。

講演会に引き続き毎回、メンター交流会を行います。スクール生が各メンターに、講演会で聞いた話を中心に、自由に質問し対話を行います。大学での研究をどう社会に活かしてきたか、就職活動をどう行ったか、また将来のキャリアプランなどについて、スクール生はメンターと積極的に意見交換し、先輩から生きたノウハウとアドバイスを得ることができます(写真10)。

写真10 交流会で学生と意見交換するメンター

メンターフォーラムはこのように、講演会と交流会を通して、スクール生が大学院生活においてどのように研究に取り組み、将来のキャリアをどうデザインしていくかについて、各界の「プロ」から経験に裏打ちされた洞察を得ることのできる貴重な機会を提供しています(写真11)。

(スクール特任助教・斉藤 健)

写真11 メンターフォーラムでの集合写真

全学教育 GENERAL EDUCATION & 総合教育 FIRST YEAR EDUCATION

学務委員会報告

平成30年7月24日(火)、平成30年8月31日(金)にそれぞれ平成30年度第1回、第2回の学務委員会が開催され、以下の議題が審議・了承されました。

平成30年度第1回学務委員会

議題1 平成31年度全学教育科目の開講計画について

平成31年度の全学教育科目の各部局への開講依頼について、ガイドラインに基づき説明がなされ、了承されました。平成31年度の変更点としては、責任部局・準責任部局以外の部局から開講される総合科目について、内容的に主題別科目の方が適している場合に、主題別科目として開講できることにしたことです。

議題2 国立大学法人北海道大学高等教育推進機構
日本語・日本文化研修コース規程の制定について

議題3 国立大学法人北海道大学高等教育推進機構
日本語研修コース規程の制定について

議題4 北海道大学高等教育推進機構学務委員会
国際教育教務・学生専門委員会内規の制定について

議題5 北海道大学短期留学プログラム規程の一部
改正について

議題6 北海道大学全学教育科目責任者等に関する
要項の一部改正について

議題7 北海道大学基礎クラス担任制度の実施に
関する要項の一部改正について

これら6件の議題は、本年8月1日付けで高等教育推進機構および国際連携機構が改組されることに伴う規程等の改正です。

議題8 北海道大学大学院物質科学フロンティアを
開拓するAmbitiousリーダー育成プログラム
規程の一部改正について

学務委員会にて審議・了承されており、学務委員会でも了承されました。

平成30年度第2回学務委員会

議題1 専門横断科目の開設について

第三期中期目標・中期計画に掲げられていた学部横断科目を、専門横断科目として具体化したものが提案され、了承されました。当面はサマーインスティテュート(SI)科目などに適用して実施することとされています。

議題2 インテグレイテッドサイエンスプログラム
第1年次学生に係る進級判定、進級要件単位
充足判定について

本年10月に初の第2年次への進級が行われます。進級判定の結果、該当する在籍者6名全員が進級することになり、内訳は物理学科3名、化学科2名、生物学科1名となりました。

議題3 国立大学法人北海道大学高等教育推進機構学務委員会大学院共通教育専門委員会内規の一部改正について

委員の代理出席を可能にするための内規の改正です。
議題4 北海道大学大学院共通授業科目実施要項の一部改正について

函館キャンパスに配信される大学院共通授業科目について、遠隔地授業実施のためのTA経費を大学院共通授業科目実施経費から配分することとします。
(白木沢 旭児 全学教育部長・総合教育部長)

教育支援 EDUCATIONAL SUPPORT

平成30年度全国大学教育センター等協議会参加報告

平成30年9月10日(月)～11日(火)、平成30年度全国大学教育センター等協議会が広島大学にて開催されました。今年度の全体テーマは「学士課程教育の質を保証する学習支援のあり方を考える」です。毎年、協議会には高等教育研究部門の教員が参加していますが、本年度は山田准教授が参加し、代表校としての事例発表も行いました。

基調講演は四国大学の谷川裕稔教授から「学士課程における学習支援～その歴史・現状・課題～」というタイトルでの講演でした。米国の学習支援の歴史とそれを追いかける形で導入されてきた日本における学習支援の現状を概観した後、日本における学習支援の課題として学習支援の実践基準を確立する必要があり、全米基準を日本版にした自己評価ガイドをデザインすることが提案されました。

代表校からの事例発表は、「ラーニングサポート室による学習支援」(北海道大学)、「山梨大学における学習支援の事例～全学プレイスメントテストと共通教育基盤教材の活用～」(山梨大学)、「名古屋

大学における学士課程教育の質の保証と学習支援の取組」(名古屋大学)、「愛媛大学の学習支援」(愛媛大学)の4つでした。質の保証がテーマであるため、どの発表も3ポリシーやコンピテンシーの設定とエビデンスデータによる検証が意識された学習支援の取り組みの紹介となっていました。

2日目の分科会では、教職協働、学習ポートフォリオ、学習成果のアセスメント、教養教育の今後の在り方、到達目標達成型教育プログラム、文理融合教育の6つのテーマに分かれて議論が行われ、北大は教養教育の今後の在り方に参加しました。話題提供を行った筑波大学は平成31年度から学士課程教育を改革し、特に先行きの見えにくい時代を生き抜くためのトランスファラブルスキル(移転可能なスキル)を重視しています。本分科会では専門が決まっていない期間に行われる教養教育をどのように実質化するかが議論の中心となりました。

(山田 邦雅)

教育評価 EDUCATIONAL EVALUATION

大学IRコンソーシアムワークショップ，シンポジウム開催

本学が加盟しており，教学IR推進の基盤となる全国共通の学生調査を提供する大学IRコンソーシアムは，2018年4月に法人化し，「一般社団法人大学IRコンソーシアム」となりました。会員校は，8月末現在で国立11大学，公立7大学，私立36大学の計54校に達しており，全国にまたがる教学IRコミュニティとして活動しています。この度，毎年定期的で開催している会員校向けワークショップが9月12日に，一般社団法人大学IRコンソーシアム，大正大学エンrollment・マネジメント研究所，一般財団法人大学IR総研の合同シンポジウムが翌13日に大正大学で開催され，本学の3名（細川，山田，宮本）が主催者側として参加しました。

会員校向けワークショップは，事例紹介とグループワークで構成され，34名の参加がありました。事例については，甲南大学より「内部質保証サイクルに提供するIRデータ」，関西学院大学より「BIツールを使うためのデータ準備」の2件の紹介がありました。甲南大学の事例では，IR Report を作成したが，大学全体や学部レベルまでの集計だったことから，学科単位までのデータ提供依頼を受けたとの報告がありました。本学でも同様の要望があります。内部質保証を実現するためには，各ポリシーやカリキュラムを設定している単位である学科，さらにその下のコース別のデータ分析が重要になります。関西学院大学からは，BI (Business Intelligence) ツールに関する基礎的な解説がありました。IRを進めていく上で，BIツールの解説が欲しいとの要望が大学IRコンソーシアムへも寄せられています。おそらく，少人数のIR担当者が効率よく各種データを可視化する有用なツールとしてBIツールが注目されているためと考えられます。しかし，BIツールは万能ではなく，目的よって表計算ソフト，データ整形・編集ツールを含めて各種ツールを使い分けること，自由記述欄にデータ分析では明らかにならない重要な意見が見られることなどが示されました。グループワークは，他大学の課題や問題点を共

有できる貴重な機会であるとのことから，継続して欲しいとの要望が参加者から寄せられました。

合同シンポジウムは，「学士課程教育の質保証実現に向けて」と題したシンポジウム，第12回EMIR勉強会（9月14日開催）と続く共同企画の前半プログラムとして開催されました。シンポジウムの副題は，「全国規模の教学IRコミュニティを活用した教学評価体制の充実」であり，全国から248名の参加がありました。文部科学省，玉川大学，大学IRコンソーシアム，大学IR総研，大正大学より発表があり，発表タイトルはそれぞれ「高等教育の質保証」，「大学における教育情報とIR」，「大学IRコンソーシアムの共通学生調査～ベンチマークの作成と分析結果～」，「学修成果の可視化とIR」，「IRデータの分析について」でした。文部科学省より学修成果の可視化の重要性が示され，その後各機関から取り組み事例の詳細が紹介されました。取り組みについて一言でまとめるのは難しいですが，各大学は様々な体制のもとで，様々な方法，ツールを用いて教学IRを推進しており，一定のモデルが存在するのではないことが確認できました。モデルは存在しないものの，主に共通学生調査を利用した各取り組みは具体的であり，シンポジウムのタイトル通り，各大学の試行錯誤の中で“教学評価体制の充実”が着実に図られていると感じました。一方，改めて感じるのは，IR担当者の情報交換の場と機会が非常に少ないことです。このようなワークショップやシンポジウムで毎回同じような質問が挙がり，さらに多くの事例提示の要望やシンポジウム継続の要望が寄せられるのは，その証拠だと思います。取り組みが進んでいる大学と，どのように教学IRを推進すればよいのか迷っている大学が両極端に存在している現状が推測されます。扱うデータによっては事例の公表が難しいなどの事情もあり，簡単に要望に応えることはできませんが，主催者側としては，情報交換の場と機会の提供に努力していきたいと思っています。

（宮本 淳）

地域社会連携 Community Relations

全国国立大学生涯学習系センター研究協議会に出席

9月18日、19日に宇都宮大学で開かれた全国国立大学生涯学習系センター研究協議会に出席してきました。同協議会は1979年に発足し、全国25の国立大学で構成されています。本学も、高等教育推進機構の前身である旧高等教育機能開発総合センターに生涯学習計画研究部が設置された1995年から参加しています。第40回となる今回は、会員大学や開催校の教職員44名に加え、来賓として文部科学省生涯学習推進課民間教育事業振興室の安彦広斉室長、国立大学協会の山本健慈専務理事などが出席しました。

今回は、40回目の協議会開催を記念して編さんされた記念誌『40年のあゆみ』が配付され、1日目の冒頭、編集委員を務めた山本珠美・香川大学地域連携・生涯学習センター准教授が、記念誌の要点や編さんの舞台裏などを報告しました。また、雑誌『社会教育』編集長の近藤真司氏が「生涯学習キーワードの40年史」と題して基調講演し、同誌の誌面をひ

もときながら、1980年代以降の社会の変化と、各年代における生涯学習の動向をふりかえりました。

続いて行われたフォーラム「[リカレント型社会]の創造に向けて」では、宇都宮大学地域創生推進機構の佐々木英和教授の進行で、事例報告とパネルディスカッションが行われました(写真1)。栃木県教育委員会の担当者からは、県内の高等教育機関とともにやっている小中学生向けの講座「とちぎ子どもの未来創造大学事業」について、宇都宮大学地域デザイン科学部の高橋俊守教授からは鳥獣管理技術者の養成講座について、それぞれ報告がありました。

2日目は、昨年度から協議会の共通研究テーマとなっている「大学生涯学習IR」について、三つの分散会に分かれて議論しました。来年度の協議会は2019年9月9日、10日に茨城大学で行われます。

(三上 直之)

写真1 パネルディスカッション「[リカレント型社会]の創造に向けて」

学生支援 STUDENT SUPPORT

特別講義「大学と社会—先輩からの熱いメッセージ」を開講 —12人の卒業生が後輩に熱弁—

全学教育の特別講義「大学と社会—先輩からの熱いメッセージ」を開講しています。

本講義は、平成10年度より当時の中村陸男総長の発案により学部1年生を対象としたキャリア教育の一環として開講しています。様々な分野で活躍している本学の卒業生が後輩にあたる主に1年生を対象に、学生時代から現在までの体験談を中心にお話をいただき、受講生である学生は、これらの講義を通じて、大学生生活のあり方や将来のキャリアについて考える能力を育成することを目的としています。

昨年度から、新渡戸カレッジと共同で開講することとなり、本授業科目が新渡戸カレッジのポイントとなるとともに、講師として12名のうち7名は新渡戸カレッジのフェローをお願いをしました。

今年度は、1年生を中心に70名の学生が受講していますが、サブタイトルどおり、多くの方々が卒業生ならではの熱いメッセージを後輩たちに送ってい

ただきました。

毎回30分程度の質疑応答の時間を確保していましたが、時間が足りなくなるほど学生から数多くの質問が出るなど充実した授業内容となりました。

(亀野 淳)

写真1 講義の様子

写真2 講師(横井氏)

写真3 質問をする学生

表1 2018年度「大学と社会」スケジュール

【秋ターム】	
① 9月27日 (木)	○ガイダンス (亀野など)
② 10月4日 (木)	○本授業の意義など, 授業の進め方 など
③ 10月11日 (木)	○青山 元志 氏 (AGC株式会社中央研究所化学品カンパニーマネージャー) ◇工学部卒 「MAGIC」
④ 10月18日 (木)	○赤間 幸人 氏 (北海道教育庁学校教育局指導担当局長) ◇教育学部卒 「教育行政に携わって ~北海道のすべての教室で豊かな学びを~」
⑤ 10月25日 (木)	○溝口 尚重 氏 (株式会社レガロキャピタル取締役) ◇農学部卒 「いちOBの遍歴と, お伝えしたいこと」
⑥ 11月1日 (木)	○中原 拓 氏 (日本たばこ産業株式会社経営企画部課長) ◇理学研究科卒 [新渡戸] 「ハイリスクな時代に自分の夢を実現するためのキャリアパス」
⑦ 11月8日 (木)	○坂本 真惟 (札幌芸術の森美術館学芸員) ◇文学部卒 「学生時代の3つの選択と学芸員の仕事」
⑧ 11月15日 (木)	○横井 成尚 氏 (サッポロビール株式会社取締役執行役員) ◇農学部卒 [新渡戸] 「社会の宝物である学生さんへのほんの小さなアドバイス」
【冬ターム】	
⑨ 11月22日 (木)	○ガイダンス, 本授業の意義など (亀野など)
⑩ 11月29日 (木)	○萩野 泉 氏 (株式会社電通データ・テクノロジーセンター DMP開発部) ◇薬学部卒 [新渡戸] 「不連続なキャリア」
⑪ 12月6日 (木)	○半谷 いづみ 氏 (大塚ホールディングス株式会社経営企画部) ◇水産学部卒 「大塚のチャレンジするモノづくり」
⑫ 12月13日 (木)	○志済 聡子 氏 (日本アイ・ビー・エム株式会社執行役員公共事業部長) ◇法学部卒 [新渡戸]
⑬ 12月20日 (木)	○石川 裕一 氏 (株式会社ぷらう代表取締役) ◇法学部卒 [新渡戸] 「異形の経営者」
⑭ 1月10日 (木)	○柴田 哲史 氏 (国立研究開発法人土木研究所寒地土木研究所 研究調整監付総括研究監) ◇工学部卒 [新渡戸]
⑮ 1月17日 (木)	○最終まとめ
⑯ 1月24日 (木)	○大西 裕子 氏 (ヘラルドの会さっぽろ代表) ◇文学部卒 [新渡戸]

※スケジュールは, 変更の可能性あり

※ [新渡戸] が新渡戸カレッジフェロー

「全学インターンシップ成果発表共有会」開催

去る10月26日（金）に「全学インターンシップ成果発表共有会」が、高等教育推進機構高等教育研究部とキャリアセンターの主催により工学部オープンホールで開催され、学生65名、企業・団体等関係者11社18名の参加がありました。

この成果発表共有会はインターンシップ終了後の学生に、その成果を振り返り、他の学生とその成果を共有し、今後の学生生活やキャリア形成に役立てるために実施したものです。

今年度のインターンシップは、9月6日に発生した北海道胆振東部地震の影響もあり、日程の短縮・変更あるいは中止を余儀なくされたケースもありましたが、企業・団体の協力もあり、場合によっては、別途日程を設定していただくなどの対応をとっていただきました。

プログラムは表1のとおりですが、本年の成果発表共有会では、まず、今年の夏季休暇中にインターンシップに参加した学生の中から、川村睦月さん(教育学部3年：北海道新聞社)と数田直也さん(大学院農学院修士1年：サッポロビール)の2名に各10分程度の成果発表をしていただきました。

その後、1グループあたり6～8名程度で9のグループに分かれて「どのようなインターンシップに参加したいか。インターンシップの期間・目的・特に入ってほしいプログラムなど、具体的な要素をプ

レゼンせよ」というテーマでグループワークを行いました。このグループワークでは、自分の参加したインターンシップをもう一度振り返り、その内容をグループ内で共有しながら意見の集約を図りました。昨年度は、隣のグループへの発表のみでしたが、今年度は各グループ2分という短い時間ながら全体での発表を実施しました。このグループワークの様子や発表を企業・団体の関係者の皆さんにも自由に見ていただき、コメントもいただきました。

こうした形式の成果発表共有会は昨年度に引き続き4回目の開催でしたが、学生、企業関係者とも満足度が高かったことから来年度以降もこのような成果発表共有会を開催していきたいと考えています。

(亀野 淳)

写真1 成果発表の様子（数田直也さん）



写真2 グループワークをする学生と見守る企業の方々



写真3 グループ発表の様子

表1 インターンシップ成果発表共有会 プログラム

日時：平成30年10月26日（金）18：30～20：30
場所：工学部オープンホール
1. 開会挨拶 高等教育推進機構 准教授 亀野 淳
2. 内容説明 キャリアセンター インターンシップ・マネージャー 川上 あき
3. 成果発表
① 川村睦月（教育学部3年） インターンシップ先：株式会社北海道新聞社
② 敷田直也（大学院農学院修士1年） インターンシップ先：サッポロビール株式会社
4. グループワーク
テーマ：「どのようなインターンシップに参加したいか。インターンシップの期間・目的・特に入ってほしいプログラムなど、具体的な要素をプレゼンせよ」
①グループ内でディスカッション（約40分）
②全体発表（各2分×9）
5. 来場企業・団体からのコメント
6. 全体総括・コメント 高等教育推進機構 准教授 亀野 淳

(敬称略)

経済同友会と連携した長期インターンシッププログラムに参加した学生の成果発表会開催

一昨年度より公益社団法人経済同友会が実施する「望ましいインターンシップの枠組み」(<http://www.doyukai.or.jp/policyproposals/articles/2015/160328a.html>)に本学もその趣旨に賛同し、参加しています。

本学からは花王、大林組各2名、野村證券、三井住友銀行、JFEスチール、第一生命、日本航空、コニカミノルタ、みずほ証券各1名の計9社、11名の学生が参加しました(表1～4)。

そして、その成果発表会を去る11月20日(火)に

高等教育推進機構高等教育研究部とキャリアセンターの主催により開催し、同インターンシップに参加した9名の学生の他、学生を受け入れていただいた企業の関係者2名、来年度に参加を希望する学部1年生4名の参加がありました。

本成果報告会では、同インターンシップに参加した学生が各10分程度、参加したインターンシッププログラムの内容、役立ったこと、今後の学生生活への活かし方などについて成果発表を行い、その発表に対して各5分程度の質疑応答を行いました。

なお、来年度からは、本インターンシップ事業を拡充するため、経済同友会は「一般社団法人経済同友会インターンシップ推進協会」(仮称)を設立する予定ですが、本学も正会員として参画し、同事業を継続して実施する予定です。

(亀野 淳)

表1 本学学生の参加状況

	文系			理系			計			
	2016	2017	2018	2016	2017	2018	2016	2017	2018	計
1年	1	1	0	1	0	0	2	1	0	3
2年	3	5	5	3	8	6	6	13	11	30
計	4	6	5	4	8	6	8	14	11	33

写真1 発表する学生1

表2 本学学生が参加している企業と人数

	文系			理系			計		
	2016	2017	2018	2016	2017	2018	2016	2017	2018
野村證券	1	1	1	1	2		2	3	1
三井住友銀行	1	2	1		1		1	3	1
富士ゼロックス	1						1		
三菱ケミカル				1	1		1	1	
出光興産				1			1		
花王	1	1	1			1	1	1	2
JFEスチール				1	1	1	1	1	1
日本航空			1			1		1	1
第一生命			1	1				1	1
デュボン						1		1	
大林組					1	2		1	2
日本板硝子					1			1	
コニカミノルタ						1			1
みずほ証券						1			1
計	4	6	5	4	8	6	8	14	11

写真2 発表する学生2

表3 本学学生の申込・決定状況

		2016	2017	2018
学生申込	説明会参加人数 (学部1・2年生)	88	97	130
	申込人数(面接対象)	17	35	50
参加	企業数	7	10	9
	決定人数	8	14	11
倍	率(学生ベース)	2.1	2.5	4.5

写真3 発表者全員の写真

表4 スケジュール(2018年度)

時 期	内 容
5月7日(月), 9日(水)	学生に対する説明会実施
5月14日(月)~17日(木)	参加希望学生の募集
5月21日(月)~23日(水)	参加申込学生に対する選考(書類及び面接)
5月24日(木)	学生へ選考結果通知
7月3日(火)または4日(水)	事前研修①
7月10日(火)または11日(水)	事前研修②
7月下旬~8月上旬	個人面談(1人10分程度)
7月下旬	自己分析の実施
インターンシップ終了後2週間以内	成果レポートの提出
インターンシップ終了後1ヶ月程度	アンケートの提出
10月26日(金)	成果発表共有会(全体)の開催
11月20日(火)	経済同友会版インターンシップ成果報告会の開催
12月頃	成績評価

新任紹介 INTRODUCTION OF NEW STAFF

着任のご挨拶

高等教育推進機構国際教育研究部
准教授 平田 未季

2018年9月に高等教育推進機構国際教育研究部に准教授として着任した平田未季と申します。私が所属する国際教育研究部の中の日本語・国際教育研究部門では、全学の留学生、研究員、教員等に向けた日本語コースを開講しており、私もコース運営に携わっております。

私は北海道大学の出身で、学部時代から言語学を学んできました。その過程で、言語学の知識が応用できる日本語教育にも興味を持つようになり、博士課程のときに3年間大学を休学し、青年海外協力隊員としてシリア、イエメンの大学等で日本語を教えました。同地の大学生にとって、日本語は将来に直接結びつくものではありませんが、皆、日本語という窓を通して新たな世界とつながりたいという強い気持ちを持ち、驚くほどの熱心さで学習に取り組んでいました。現在、どちらの地域も容易に渡航することが叶わなくなりましたが、今なお、現地で日本語の学習を続け、異なるコミュニティとのつながりを保とうとする学生達があります。

翻って、日本に住む人達の場合、物理的に所属するコミュニティに溶け込むため、日本語が必要にな

ります。今年度後期の北大の日本語コースには約600名からの履修申し込みがありました。彼（女）らの日本語に対する需要は多様であり、日本語で論文を書く必要がある者もいれば、子どものために保育所や小学校の連絡を読み解く必要がある者もいます。例え研究生活はすべて英語で事足りるとしても、現在の日本では、生活のために、もしくは周囲の人々と関係を構築するために、少なからず日本語を使わざるを得ません。このような現状を考えると、日本に住む人達が日本語学習の機会を持つことは権利として保障されるべきだと思われま

す。同時に受入側である私達も日本語について考え直す必要があります。北大には約90地域からの学生がいますが（2017年5月現在）、その最大の共通語は、英語ではなく「やさしい日本語」(Plain Japanese)です。多様な人達が存在する大学において日本語は既に母語話者のものだけでないこと、通じる日本語を使う必要があることを自らも意識し、また多くの人に意識してもらえよう努めていきたいと思

日誌 EVENTS, August–November

8月

- 8月2日～3日 (行事)
 - お茶室「差室」一般公開
- 3日 (行事) トークショー「差室における対話」
- 4日 (行事) 第1回新渡戸スクールメンターフォーラム
- 4日～7日 (行事)
 - オープンキャンパス(札幌キャンパス)
- 6日 (行事) オープンキャンパス(函館キャンパス)
- 6日～7日 (行事)
 - 北海道150年「トキトキイロイロ」
- 6日～8日 (講座)
 - 大学教員準備講座～Future Faculty Development Program
- 7日 (行事) 日本語研修コース修了式 (2018年4月入学者)
- 7日 (講演) MITメディアラボ石井裕教授特別講演会「独創・協創・競創の未来」
- 7日 (行事) 第101回サイエンス・カフェ札幌「ひとと自然の150年～北海道 映像でつなぐ記憶～」
- 9日 (会議) 第3回総合教育教務・学生専門委員会 (持ち回り)
- 9日 (研修) ワークショップ「多様な大学院生と効果的な指導関係を築く」(高等教育研修センター)
- 9日 (研修) ワークショップ「アクティブラーニング：ファシリテーションの技法」(高等教育研修センター)
- 10日 (行事) PAREプログラム・サマースクール修了式
- 10日 (研修) 研修会「発達障害のある学生の理解と対応」
- 17日 (研修) 北海道大学TF研修会
- 18日 (研修) 事務職員のためのプレゼンテーション入門 (高等教育研修センター)
- 20日 (研修) アクティブラーニング型授業設計ワークショップ (高等教育研修センター)

- 21日～27日 (会議)
 - 平成30年度第6回高等教育推進機構運営委員会 (持ち回り)
- 23日 (会議) 第4回教育改革室会議
- 23日～24日 (会議)
 - 第68回東北・北海道地区大学等高等・共通教育研究会(室蘭工業大学)
- 24日 (研修) ワークショップTeaching in English (入門編)(高等教育研修センター)
- 25日 (行事) 北海道大学進学相談会 (東京)
- 27日 (会議) 第6回RJE3プログラム国際運営委員会
- 31日 (会議) 第96回教務委員会
- 31日 (会議) 第2回高等教育推進機構学務委員会
- 31日 (会議) 平成30年度第2回授業評価専門部会
- 31日 (行事) RJE3プログラム基礎科目修了証コース修了式

9月

- 9月3日 (会議)
 - 全学教育科目責任者会議
- 7日 (会議) 第5回新渡戸カレッジ定例会
- 11日 (会議) 第2回クラス担任等連絡会
- 12日 (会議) オープンエデュケーションセンター連絡会
- 12日 (会議) ELMS定例会
- 14日 (会議) 第2回NITOBEd教育システム運営会議 新渡戸スクール教務専門員会
- 16日～21日 (会議)
 - 平成30年度第7回高等教育推進機構運営委員会 (持ち回り)
- 19日 (会議) 平成30年度北海道地区FD・SD推進協議会総会
- 19日 (会議) 第3回NITOBEd教育システム運営会議 新渡戸カレッジ教務専門員会
- 21日 (研修) アクティブラーニング導入ワークショップ～Workshop on introducing Active Learning to your classes (高等教育研修センター)

- 25日～26日 (研修) 第36回北海道大学教育ワークショップ「アクティブラーニング型授業の実践」(高等教育研修センター)
- 25日 (行事) 学部・学科等移行ガイダンス
- 26日 (行事) 学部・学科等紹介
- 28日 (会議) 第1回国際教育教務・学生専門委員会
- 28日 (会議) 第1回国際教育研究専門委員会
- 28日 (会議) 第3回NITOBEd教育システム運営会議
- 29日 (行事) ホームカミングデー (キャンパスツアー)

■ 10月

- 10月1日 (会議) 第5回教育改革室会議
- 1日 (行事) 北海道大学短期留学プログラム(HUSTEP)、日本語日本文化研修コース(日研コース)及び日本語研修コース入学式
- 1日 平成31年度私費外国人留学生入試学生募集要項公表
- 5日 平成31年度一般入試学生募集要項公表
- 5日～12日 AO入試・国際総合入試・帰国子女入試インターネット出願登録受付
- 7日 (行事) 北海道大学進学相談会(大阪)
- 13日 (行事) 新渡戸カレッジ第3回グループミーティング
- 14日 (行事) 第102回サイエンス・カフェ札幌「竹取工学物語。～自然のモノをよるづのことに使ふには～」
- 14日 (行事) CoSTEPメディアデザイン実習×No Maps×円山動物園「アニマルめがねラボ」～VRで生き物の視覚を考えよう～
- 15日 (研修) LGBT研修会～多様な性と共生できる教育環境づくりを目指して～
- 17日 (会議) オープンエデュケーションセンター連絡会
- 17日 (会議) ELMS定例会

- 17日 (説明会) 海外短期語学研修説明会
- 18日 (報告会) 国際インターンシップ報告会
- 19日～24日 (会議) 平成30年度第8回高等教育推進機構運営委員会(持ち回り)
- 19日 (会議) 第4回全学教育専門委員会
- 21日 (行事) 動物学会公開シンポジウム「秘められた北の動物誌」
- 23日～24日 (説明会) 交換留学説明会
- 24日 (説明会) 海外短期語学研修説明会(スペイン語研修)
- 25日 (行事) 「森をつかう～研究者とクリエイターが生み出すものづくり」
- 26日 (会議) 第6回新渡戸カレッジ定例会
- 26日 (行事) 全学インターンシップ成果発表共有会
- 29日～30日 (報告会) 短期留学スペシャルプログラム帰国報告会
- 30日 (会議) 第6回教育改革室会議
- 31日 (報告会) グローバル・キャリア・デザイン1(FSP)帰国報告会

■ 11月

- 11月1日～2日 (会議) 平成30年度国立七大学共通教育主幹部局長会議・主幹部局事務協議会(九州大学)
- 2日 (研修) ELMS講習会～授業でELMSを活用する～(高等教育研修センター)
- 2日 (研修) ワークショップ「相手に伝わる説明力を身につける」(高等教育研修センター)
- 3日 (行事) 新渡戸カレッジ第3回対話プログラム(1日目)
- 11月4日 (行事) 秋のキャンパスツアー
- 4日 (行事) 新渡戸カレッジ第3回対話プログラム(2日目)
- 6日 (行事) 新渡戸カレッジ特別講演会
- 7日 (会議) 入学者選抜委員会

- | | | | |
|--------------|--|--------------|---------------------------------|
| 8日 (説明会) | グローバル・キャリア・デザイン2 (FSP) 説明会 | 20日 (行事) | 経済同友会連携インターンシップ成果発表会 |
| 9日 | AO入試・国際総合入試・帰国子女入試第1次選考結果発表 | 21日 (会議) | 第5回全学教育専門委員会 |
| 9日～10日 (研修) | 第37回北海道大学教育ワークショップ「アクティブラーニング型授業の実践」(高等教育研修センター) | 21日 (説明会) | グローバル・キャリア・デザイン2 (FSP) 説明会 |
| 13日 (会議) | 第2回総合教育移行専門委員会 | 22日 (会議) | 第4回総合教育教務・学生専門委員会 |
| 14日 (研修) | ELMS講習会～授業でELMSを活用する～(高等教育研修センター) | 22日 (会議) | 第2回成績評価結果検討専門部会 |
| 14日 (会議) | オープンエデュケーションセンター連絡会 | 23日 (研修) | 事務職員のためのプレゼンテーション入門(高等教育研修センター) |
| 14日 (会議) | ELMS定例会 | 25日 | AO入試・国際総合入試・帰国子女入試第2次選考日 |
| 16日 (会議) | 平成30年度第3回授業評価専門部会 | 26日～27日 (研修) | 平成30年度北海道地区大学SD研修「大学職員セミナー」 |
| 16日 (会議) | 第17回RJE3プログラム学内運営会議 | 27日 (会議) | 第2回国際教育教務・学生専門委員会 |
| 18日 (行事) | 第103回サイエンス・カフェ札幌「つかめヒカリ みがけセンス～ミライをひらく 人工光合成～」 | 29日 (会議) | 第7回教育改革室会議 |
| 19日 (会議) | 第2回大学院共通教育専門委員会 | 30日 (会議) | 第97回教務委員会 |
| 19日～21日 (行事) | 大学ICT推進協議会2018年度年次大会(共催) | 30日 (会議) | 第3回高等教育推進機構学務委員会 |
| | | 30日 (会議) | 第7回新渡戸カレッジ定例会 |

行事予定 SCHEDULE, January-March

◆1月

- 7 (月) 授業再開
- 18 (金) センター試験準備 (休講)
- 19 (土) ~20 (日)
大学入試センター試験
- 24 (木) 木曜日の授業終了日
- 29 (火) 火曜日の授業終了日
- 30 (水) 水曜日の授業終了日
- 31 (木) 初習外国語統一試験日(通常授業は休講)

◆2月

- 1 (金) 金曜日の授業終了日
- 4 (月) 月曜日の授業終了日 (第2学期授業終了日)
- 5 (火) 午後
学部・学科等移行ガイダンス
- 6 (水) 学部・学科等紹介

- 18 (月) 全学教育科目成績Web上公開
- 18 (月) ~19 (火)
全学教育科目成績確認及び
成績評価に関する申立て期間
- 25 (月) ~26 (火)
一般入試個別学力検査等 (前期日程)
- 27 (水) 正午
全学教育科目成績確定
- 27 (水) 午後~
第1年次進級判定
- 27 (水) 午後
学部・学科等移行手続き
- ~ 3/20 (水)
(第1回志望調査~各学部振り分け)

◆3月

- 12 (火) 一般入試個別学力検査等 (後期日程)



ニュースレター 2018, No.113 目次

(巻頭言) 入試改革に関する最近の動向 藤田 修 1	2018年度「大学と社会」スケジュール 19
新渡戸スクール 3	「全学インターンシップ成果発表共有会」開催 20
学務委員会報告 14	経済同友会と連携した長期インターンシッププログラム に参加した学生の成果発表会開催 21
平成30年度全国大学教育センター等協議会参加報告 15	新任紹介 23
大学IRコンソーシアムワークショップ, シンポジウム開催 16	日誌 24
全国国立大学生涯学習系センター研究協議会に出席 17	行事予定 27
特別講義「大学と社会—先輩からの熱いメッセージ— を開講—12人の卒業生が後輩に熱弁— 18	目次・編集後記 28

編集後記

新渡戸カレッジと新渡戸スクールを総称したNITOBEd教育システムは新しい時代に入りつつあります。前号は新渡戸カレッジを、今号では新渡戸スクールの新しい姿を紹介します。今年の8月には、本機構に国際教育研究部が設立されました。この研究部については、次号で紹介する予定です。社会の動きに合わせて、本学の組織も速やかに移行しています。ニュースレターは、そうした本学の教育改革の動きを伝えてまいります。ご期待下さい。(歳)

ニュースレター

(北海道大学高等教育推進機構広報誌)
通算 第113号

発行日： 2018年12月27日
発行元： 北海道大学高等教育推進機構
〒060-0817 札幌市北区北17条西8丁目
編集委員：◎細川敏幸・鈴木誠・飯田直弘・岩間徳兼
ご意見、お問い合わせは◎印の編集委員まで
電話 (011)706-7514, FAX (011)706-7521
インターネットホームページ：
<https://www.high.hokudai.ac.jp/center/>